

1997年3月までの福岡在住10年のもとでも続けてきた「かながわ総研」理事長の仕事に98年春に辞して、海峡の街?下関市で働き暮らすことになり、はや3年が過ぎた。昨秋、学長職に再選され、あと3年は神奈川に帰れない。お詫びの代わりあるいは「お忘れなく」との挨拶代わりに、折々の随想を「赤馬(あかま)通信」と題して、この「所報」に掲載させて頂くことになった。よろしく!なお「あかま=赤馬」については、『広辞苑』を引いてください。

さて学長就任直後の入学式で壇上に大きく掲示された日の丸と出くわして、大学を学問の国家からの自由(憲法23条)の場だとする私の主観と、この大学の40年余の式典伝統とが衝突することを私は知った。似たような主観の教員が既に何人かいて、翌99年春の式典から日の丸掲揚は止めようとの運びになったが、折りからの広島世羅高校事件や国旗国歌法制化問題とも連動して、朝日新聞のスクープ的報道、産経の学生に退学を勧めるコラムなどを見た下関内外有名無名の人士からの激しい非難攻撃—「学長辞任せよ」「日本から出て行け」「日本刀で斬る」—を浴びることになった。結局、その後の春の卒業式・入学式計6回では日の丸掲揚が続いている。掲揚中止を断固貫徹できない無力さを情けなく思いながら、それでも「教育の場に日の丸はふさわしくない」との発言を機会があれば続けてきた。

このような私の対応に対して、日の丸掲揚中止を望む流れの中から「タバコを吸いながら禁煙を説くようなもの」などの痛い批判を受けることもあるが、報道される私の発言を捕らえ市議会でも極右思想の議員が執拗に問題視することを反面教師としたり、日の丸不掲揚の伝統を守ろうとして闘っている長崎県立大石村学長や、君が代を「ココロを込めて歌わない」として処分を受けている北九州市小中学校の教職員たちが「あなたの姿勢に励まされています」と言ってくれることなどを教訓としたりして、言論の自由を行使し続けているのである。

労働問題での講演はこの3年でただ1回。『かながわ総研 所報』93号の拙論「21世紀に向かう労働組合運動の展望と課題」をテキストとして行なった国労広島地本の幹部学校(長門湯本温泉泊まり込み)であった。日の丸問題、それが広がって憲法や、日本の近現代史あるいは戦争をテーマとする講演は断らないことを原則にして、依頼があればむしろ下関市大の立場を「社会的に説明」する場にもなると捉えて出かけて行く。この8月15日は「日本の近現代史と国際性」との演題で下松という所で講演するし、去る7月7日は福岡に出かけて「21世紀の日本と日本国憲法の意義」をしゃべったごとくである。

後者は「第15回 アジア太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ心に刻む福岡集会」というもので、有名な天神「親不孝通り」のごく近くにある光円寺(浄土真宗)で行われた。1985年の中曽根靖国公式参拝を違法として訴訟を起こして闘ってきた仏教者、キリスト者が中心の運動である。私は、福岡に10年暮らしていたにもかかわらず、街の繁華街に隣接してお寺が五つあるこの区域の風景も知らなかったし、年々のこの集会も知らなかった。この世には知らない世界が沢山あって、謙虚になって知り関わる努力をしなければと68歳にして改めて思った次第。ところで、靖国公式参拝をした同じ中曽根の仕掛け=国鉄分割民営化で職を失い、労働委員会から裁判所へと困難な闘いを進めてきた解雇労働者の闘いも15年を過ぎた。憲法20条(信教の自由)を破った同じ権力者が憲法28条(団結権)をも蹂躪したのである。同じ戦線を組んで反撃することはできないのだろうか。(01/07/10)

渡邊崋山のこと

当研究所理事・下関市立大学学長 下山 房雄

その名を「蛮社の獄」の項目につなげるといった程度の受験勉強的知識しかなかった渡邊崋山について、私が興味を抱くようになったのは、1977年春、上野の国立博物館で一幅の山水画＝崋山「千山万水図」に出会ってからである。

縦148.3cm横71.2cmのその画の中景から遠景にまず私は目を注いだ。すると、左が陸で右が海だ。陸は幾重もの入江を挟み、諸処に霞の帯を纏った山々であり、その山々の列は海に大岩あるいは小岩を放つ。ある入江には小さな帆船が、別の入江には帆柱が何本もの異国船らしいものが、幾艘づつか浮かんでいる。目線を上にあげると、遠くにうっすらと富士山とも見える山が描かれている。波を立てて陸地と入り合う海を眺め、紙幅を右に越えてゆたったりと広がる大洋のイメージを脳裡に結びながら、目を下方に転じて近景に至るとアッと驚く。滝が落ちているのだ。その滝の落ちる先に集落があり、人々が歩いている。さらにその先に、つまり画面一番下に浜辺があって、そこにも船が複数浮かんでいるではないか。

果て無く広がっていくさまの大洋と想ったのは実は湖だった。近景の滝を確認したうえで、改めてこの絵全体を観ると、何かの危うさを秘めた独特の緊張感が画面に漲ってくる。この緊張感を得てから今日まで四半世紀、崋山は私にとって心に懸かる存在であった。

ところで「新かながわ」に対応する山口の民主的的地方政治文化紙は「山口民報」である。この「山口民報」01年7月8日号の一面コラム「奇兵隊」は、「寝苦しい一夜、『渡邊崋山』(石川淳、筑摩書房)を読む。戦前、太平洋戦争前夜の作だが、時代に迎合しない書きっぷりがいい。」で始まる。小泉「経済改革」を水野「天保改革」になぞらえて「新しい時代を信じ、ひたすら真実を究めようとした崋山の精神は時代を超え重みを増してくる」と結ぶ随想であった。これに触発されて、この夏のヴァカンス20日間を過ごした海老名市の図書館を利用などして崋山関連の本を8冊ばかり精読あるいは斜め読みした。まず岩波文庫の『崋山・長英論集』(これは10年近くツン読状態だった)、それから岩波書店『石川淳選集12巻』(80年10月)、芳賀徹『渡邊崋山優しい旅びと』(朝日選書86年1月)などなど。「などなど」には、崋山の春画を論ずる怪しげな本や、児童書の偉人伝シリーズの一冊もある。これらの学習過程でなるほどと思ったり、エッと思ったり、いろいろ認識の世界が広がり有益だった。ここでは以下三点を記しておきたい。

まず「千山万水図」について。崋山は「真景」つまり写実を重んじた。観念で中国風の山水を描く「山水画」を「空疎」と難じている。そのなかで彼がたった一枚描いた山水が「千山万水図」なのだ。「図」中の款に「丁酉(天保八＝1837年)とあり、ここから「四十五歳の作になる。二年後に「蛮社の獄」で逮捕され、やがて自刃するに至る最晩年にさきがけた作品」との解説もあるが(77年「日本の山水画展」カタログ)、国許＝渥美半島田原に謹慎蟄居中の作品殆どが製作日付を入獄(1839年5月)以前に溯って記されているとの定説を私は採りたい。そうすれば「千山万水図」は、単に「構想奇抜」で「凄い」との感に留まらず、中遠景に海洋国家日本の客観状況が描かれ、近景にはその状況を自覚せぬままに人々が生きている閉塞した日本の姿が描かれているとの断絶構造を持つとの私の解釈に現実味を与えるからだ。なお「千山万水図」は秋田の素封家の個人蔵で特別の展覧会でもなければ観ることはできないが、田原に行けば良くできたコピーが常時展示されているらしい。

風景・人物の「真景」的スケッチの入った峯山の旅行記が何点かある。神奈川関連では、1821年6月（峯山、数えて29歳）に戸塚で田原領主の弟を迎えて後、鎌倉、江の島を訪ねた『趨相日記』（挿画無し）および1832年9月に大山街道（矢倉沢往還）を厚木まで行った『游相日記』がある。1832年10月には妹の嫁入り先＝桐生に20日余り逗留する『毛武游記』が作られ、そこには私が国民学校5年から旧制桐中を経て新制高校2年までを過ごした桐生および近傍の地の雷電山、赤岩、大間々、葉鹿など懐かしい名が登場している。しかし、その桐生の地では私の少年のときも、その後、墓参や同窓会で訪れたおりにも、峯山のことは一切聞いたことがない。それに対し、現在の海老名市では峯山に因むものに出くわすことができる。まずSATYの専門店街に行けば「その名に恥じぬ銘菓」を自称する「峯山」が売られている。包装紙は峯山の「真景」画である。市内柏ケ谷の赤坂というところには、ここで峯山は大山街道を離れ、小園村、早川村（現綾瀬市）に向かったとの案内板が立っている。小園、早川には、三宅坂の田原藩江戸屋敷で育った幼少時の峯山を可愛がってくれ、後に藩主の手が付き一子（三宅友信）を生んで実家に戻された「お銀さま」の生家（早川）と婚家（小園）があったのである。古代から中世にかけての古東海道跡といわれるその側道を、峯山の170年後の私が猛暑の中、汗をダラダラ流し、坂を上下しながら自転車で辿った。凄まじい宅造で昔の面影は殆ど無いが、途中で「暑いのに頑張りますね」など見知らぬ人から二度も声をかけられるといった田舎らしい場面に入り込むことがあった。

最後に、石川淳「渡邊峯山」。これは凄かった。じわじわと陰謀を巡らせて峯山を追いつめていく鳥居耀蔵など幕政権力側、峯山逮捕後に身の危険を恐れず助命、赦免を必死に工作する先生や友人たち、逆に急に知らん振りを決めこむ旧知の人々、これらの人物像をくつきり浮かび上がらせるクールな叙述である。おそらく石川は、治安維持法弾圧下での様々な生き様を想起しつつ書いたのではないか。また「頭脳のたたかいではいつも白日の下、民衆の眼前でおこなはれる。もっとも蘭学者の看板を掲げた一群のうち、それに値しないものもあることはみたので、さういふものの稼ぎ場は強権とのうへによりほかになかった」といった学者評や、「これが日本だ」という日本＝最上級を示す寛政期江戸の市井の言葉を評して「これはほかのことについては薯の煮えたのも知らない評価」と書いている点など、1941年の石川の叙述が2001年の今日に持つ現実性はいやになってしまうほどである。

石川が1964年3月に書いた「筑摩書房版「渡邊峯山」後記」も面白かった。「シナのいくさは泥沼に落ち、やがて太平洋に事あろうとするまぎはにあたって、国内では学問芸術をぶつつぶすためのたくらみが図に乗っていた」当時「芸術の迫害者に対して、これを芸術家の典型として立てるのに峯山は戦術的に好都合とおもはれた」と彼は書いている。しかし彼は「峯山のひととなりに完全に感服しきってゐたわけではない」し「世界観からいって、もう一息といふ不満がないこともない」とも述べる。蘭学を通じて当時の世界情勢を把握し「万事議論、皆究理を専務」とする西洋人の特質を評価しながら、「不忠不孝渡邊登」の七字の遺書にみるように、藩主に忠義立てして自害するという儒学思想の枠組みで生涯を終わったことなどには、私もどうも納得しかねる。しかし、忠孝と勤儉の鑑から脱却せぬまま、幕政批判者として死に追い込まれるという矛盾的構図が却ってわれわれの心を打つということなのかもしれない。(01/08/13)

10月末から11月にかけて、オーストラリアのブリスベーンにでかけた。下関市大との交流大学が二校あり、そこでの学生交換留学制度のレベルアップを図るためであった。

初めての南半球への旅で、東西の距離しか考えてなかった太平洋の南北の距離を実感するなど、新しい経験をいくつかした。下記の小さな経験もその一つである。

ホテルの前のコンビニで、グレープジュースの大きなペットボトルを買ったのである。ラベルに CONSERVATIVE FREE とあった。日本語のフリー＝自由の語感からすれば、保存剤使い放題だが、このラベルの意味は当然ながらそういうことではない。保存剤は使っていませんということだ。SMOKING FREE との掲示もみた。これも、タバコ吸い放題ではなく、そこはタバコから免れるゾーン、つまり禁煙ということである。

「自由」がこのように、何かから切り離されるという意味だということは、労働者学習運動などでマルクス経済学を学んだ人は、労働力商品化の条件である「二重の自由」のところで知ることである。人格的自由は封建的束縛、つまり主従のしがらみからの自由であり、生産手段からの自由は、土地から放り出されること、あるいは資本主義経営との競争に対抗できず道具がゴミに化す手工業職人の状況をいう。とりわけ後者の「生産手段からの自由」における「自由」は、日本語のイメージと随分ちがうのでかなりの人が戸惑うのである。

私はラベルの「FREE」を眺めながら、改めて1999年春の下関市大日の丸事件を想起することになった。日の丸式典掲揚40年の伝統「改革」は結局実現できないまま、その後6回の日の丸式典を私は続けているのだが、大学に国旗も日の丸も相応しくないという言説は、機会あれば述べたてている。それで「禁煙を説きながら喫煙しているようなもの」との批判を受けたりもした。しかし、私の言説が報道されるたびに極右（第二次大戦の反ファシズムの側に立つのが保守＝右翼というヨーロッパ的基準での表現。この意味では、日本の保守＝右翼のかなりは極右。）の議員が市会で私を論難することを反面教師としたり、あるいは各地で日の丸（長崎県立大では不掲揚の伝統「改革」が県や県自民党から迫られて、憲法学者の石村学長が断固拒否を貫いている）や君が代（北九州市の小中学校では「心をこめて君が代を歌わない」との理由で用務員を含んでの処分が年々行われ、裁判闘争＝ココロ裁判が闘われている）に抗している人たちが私の行為に励まされていると伝えてくれたりすることに支えられて、私は憲法23条の「学問の自由」とは何より国家からの自由であり、たとえ日の丸の赤の部分グリーンを増やしても国旗であるならば、大学式典には相応しくないと言い続けているのだ。そもそも近代憲法は、国家の統治ルールを専制支配にならぬように決めたものだ。ヤクザの拷問でも許されないが、憲法が明文で禁止しているのは公務員による拷問である（36条）のも同じ趣旨なのである。

要するに「自由」とは真空状態のところでは好き勝手にやることではなくて、何かから切れて離れるという緊張的関係の表現だということを、オーストラリアで再確認したのだ。と、ここまで書いたところで、手元にある神奈川学習協『学習運動ニュース268号』（01.10.15）をふと見た。三瀬副会長のアピール文「学習運動を前進させよう！」の本論冒頭文章が「SMOKE FREE? 無煙空間をひろげる会」に私は参加しました—ではないか！フリーを議論するのに、わざわざブリスベーンの話をするのは無かった。ごめん!!（01/11/27）

テロ国家アメリカを描く本と映画

当研究所理事・下関市立大学学長 下山 房雄

老いの哀しみということになる。赤馬通信前号と第1号とで3行ばかり殆ど同じ表現があった。一旦書いたことを忘れていたのである。年寄りの話はいくどいと言われるように繰り返が多い。そういう行状を私もやってしまった。所報読者にお詫びしたい。

気がついてみれば、もう「ながら」では仕事が出来なくなっている。かつては、FMを聴きながら原稿を書き、テレビを観ながらモノを読んでいた。しかし、もうそうはできなくなった。寂しいが自然の理だ、仕方がない。そこで年末年始、ただ本を読むだけ、ただテレビを聴視するだけということをして、何時間かやった。その感想が今回の通信です。

まず、チョムスキー『9. 11 アメリカに報復する資格はない!』(文芸春秋 2001年11月30日刊 1143円)。この本は、「毎日」の書評(01.12.02 池澤夏樹)と「赤旗」のコラム(01.12.05 潮流)とで知って、注文入手した。私が買ったのは12月15日二刷のものである。原著の刊行は2001年としか紹介されていないが、収録されているインタビューの最終月日が10月5日だから、その後ということになる。これらの日付から、すばやい訳書の刊行、悪くない売れ行きという好ましい事態の進行がわかる。チョムスキーについては、ベトナム反戦以来、アメリカ政府のやり方に反対する知識人の署名に折々名前が出る言語学者という程度の知識しかなかった。著書を読むのは、初めて。この本の解説で、彼の著作はソ連で「禁書」だったということも初めて知った。この本はチョムスキーの本職ではない時事評論であるから判らないのだが、彼の言語学がスターリン言語学とぶつかるものであるのか。

さて、本書の視角は、アメリカを現代の帝国主義国家とみている私の認識枠組みと一致するもので、特別驚くものではない。ただ挙げられている事実には、私の記憶にないものかなりあり、刺激的だった。80年代のニカラグア・サンディニスタに対するアメリカの暴力的介入は知っていたが「一九八六年に米国は国際司法裁判所で国際テロの廉で有罪を宣告された」が「判決を侮りとともに斥け、ただちに攻撃をエスカレートさせることで応じた」(本書22-23頁)ということはその最大のものである。チョムスキーは指摘する。アメリカの「テロ戦争はニカラグア軍の代わりに「柔らかな標的」—農業協同組合とか診療所のような無防備の民間標的—を攻撃するという公式の政策に合わせ、拡大した。米軍による完全な制空権とスーパーバイザーから与えられた高性能の通信機器のおかげで、テロリストたちはこうした命令を実行することができた。」(同書95頁)

この叙述は、NHK衛星テレビが流したケン・ローチ監督『カルラの歌』(1987)の強烈な一場面と照応する。「アンジェラの灰」「フルモンティ」でイギリス・プロレタリアートの古今の生き様を演ずるロバート・カーライルが、この映画ではグラスゴー市バス運転手に成る。彼は、教養が浅くて妹に「ほんとにわかってんの？」と危ぶまれながら、内戦のニカラグアに向かう。無賃乗車で捕まりそうになったニカラグアからの女性を、持ち前の無鉄砲な正義感から救った縁で、彼女に惚れ込み、彼女の国を訪れ、そこでCIAの訓練指揮のもとにテロを行なう「コントラ」の攻撃に遭遇するのである。衛星写真で学校、診療所を把握し、それを「軍事目標」とするテロ攻撃だ。彼とともに我々の教養もここでぐっと深まる。

マスメディアあるいは商業メディアの主流が当局発表垂れ流し報道に墮していることは否定のしようがないが、上掲のような作品を世に送る部分の存在は誠に嬉しい。(02/01/30)

山口県には田中角栄型の政治家がいまいといわれることがある。選挙区に道路や橋をかけることに熱意を燃やさず、もっぱら中央政界での栄達を追う国士型の保守政治家が多いというのである。ほんとに土建屋との縁が薄いかということは措いて、吉田松陰的に国を憂う格好をとる保守政治家が目立つのは確かだ。前回衆院選で下関を含む選挙区では、自共一騎打ちの結果、12万対5万で現官房副長官安倍晋三氏が当選したのだが、彼は天皇元首論者だと聞く。60年安保改定と71年核つき沖縄返還の立役者・岸信介＝佐藤栄作兄弟は、山口県出身だ。私の昼の散歩コース3本の一つのルートにある垢田八幡宮には、「元帥侯爵山縣有朋」の筆になる日清日露両戦役の記念碑に並んで、「支那事変大東亜戦慰霊碑」総理大臣佐藤栄作書「昭和四十三年九月垢田町建之」などと彫られた石碑が建っている。

尊皇と征韓の吉田松陰（松蔭の杉梅太郎宛書簡に「国力を養い、取り易き朝鮮、満州、支那を切り随え」と主張されているごとくである）以来の流れとは逆の立場で名を挙げた人も少なくない。私が旧制桐生中学1年のころ（1946-47年）、日本共産党のリーダ者として名を馳せたのは徳田球一、志賀義雄、野坂参三のトリオであるが、うち志賀、野坂は、萩出身である。徳田、志賀の「獄中18年」は、軍国少年だった私に驚愕の事実を突きつけるものであり「同志徳田、褒め称えよ！ 素敵な同志！」の歌も抵抗なく耳に入った。志賀は、実は門司生まれ（1901川本姓）であるが、母の実家＝志賀家を継ぐため萩に移り、現在、観光ポイントになっている武家屋敷の街で育った。大天狗面が見世物となっている円政寺の入場料を払うと「萩城城下町絵図」を渡されるが、そこに名所として「志賀義雄旧宅」が指示されている。菊屋横丁を挟んで高杉晋作旧宅の向かい、田中義一誕生地の隣だ。ネット（ヤフー）で索引をかけるとなお315項目がヒットされる志賀であるが、観光客のほとんどは誰のことかもいまや知らないだろう。「獄中18年」をソ連頼りで頑張ったのでもあろうか、晩年60年代に日ソ共産党が対立したときに、ソ連にくっついて、左翼傍流にそれしてしまった。

野坂参三は萩の商家生まれ（1892小野姓）、後に母方の姓を継ぎ、野坂姓となる。萩中学入学では志賀の先輩になる。野坂は、ソ連崩壊後の90年代に、実はスタリリンに山本懸造を密告したソ連「内通者」だったことが暴露され、失脚した。野坂ゆかりの地が萩のどこなのかを示すものは、私の知るかぎりどこにもない（彼の全10巻だったかの自伝『風雪のあゆみ』（新日本出版社）はついに読まないうちに、版元絶版でいまや入手困難だ）。

下関＝山口では、大量テロ＝中国文化大革命を指導した毛沢東を熱狂的に支持した「左翼」が、未だけっこう力を持っていることにも驚かされる。その大衆紙「長周新聞」は地域情報量が豊富で、持っているネットワークの広さを想わせる。日の丸事件以来「私を刀で刺すという人以外、誰とでも会う」と宣言している私の学長室を繁々訪れるのは、この党派の主派あるいはその諸分派（複数！）である。ところで、日本共産党がソ連党にも中国党にも追従せぬ路線を選択し、「社会主義体制」崩壊後のいま、発達した資本主義国の中での共産党として異例に強い存在になるのに力を発揮した宮本顕治氏の出生地は、山口県光市だ（1908当時熊毛郡光井村）。私は未だ訪ねてはいないが、生家などゆかりの場所が現存する。

その光井村は、また戦前の日本共産党幹部の一人、市川正一（1892-1945）の故郷でもある。本籍地だが、「うまれたところ 宇部」に始まる市川が獄中で描いたスケッチ「子供時代

からの思い出地図」9枚の6番目に「三井 十一、二才頃」とあるので、育った場所でもある。その地＝現光市鮎返りに、1972年3月、萩の篤志家が土地を寄贈して立派な「市川正一の碑」が建てられた。以来、毎年市川が宮城刑務所で獄死（遺体は1948年3月に東北大医学部ホルマリン池槽で発見）した3月15日に碑前祭が行われていると知って、こんど参加した。天気予報では雨で、進入路がぬかるので長靴でもと言われていたのだが、当日は晴れ、あせびの花の白が見事な小園地に40人ほどが集まった。

乞われて私は次のような挨拶を行った。「戦後民主主義は、自由な思想、言論の表明を、社会的経済的に規制抑圧する不十分さを残してはいるが、逮捕、投獄といった権力による政治的弾圧は禁じているという進歩性を持つ。その進歩は、アメリカ占領軍が与えたのではなく、市川さんなど自由も民主主義も無かった戦前戦中の運動家たちの命がけの活動の貴重な成果として獲得されたものと理解する。・・・」

私に続けて挨拶した田熊真澄氏（治安維持法国家賠償要求同盟山口県本部名誉会長）は、市川正一氏とともに法廷闘争を闘った現在93歳の老人である。老人の表現を使うのにためらいを感ずるほどお元気な方で、碑前に至る10段ばかりの石段をひょいひょい昇降されるし、話も明晰、力のこもったものであった。この田熊氏は、三井村から数キロしか離れていない塩田村の生まれで（1908）、1925年に上京して上野の岩倉鉄道学校に入り、目蒲電鉄の車掌となって組合運動に参加、1929年4月20日に逮捕された。逮捕は徳田、志賀らが捕まった4.16共産党大弾圧の一環だったが、当時のご本人は「弾圧されるまで党のことも科学的社会主義のことも知りませんでした。この市ヶ谷の未決での官本と自分で買った本とで勉強して確信をつけていきました。」という状態だった。1932年に「入党未遂罪」！で懲役3年の判決を受ける。

田熊氏が共産党に入党するのは、1995年である。「三月、志位和夫書記局長（当時）が、地方選挙の応援に来て市川正一碑に参りました。その時、私も一緒に参加して書記局長からあらためて入党を訴えられました。・・・思えば長い道のりでした」とご本人は述懐している。この田熊さんの道のりは、林洋武氏（前日本共産党山口県委員長、現国賠同盟山口県本会長）が聞き書きをしてA4×19頁のプリント『最後の4.16被告 治安維持法犠牲者 田熊真澄さんに聞く』にまとめられている（かながわ総研に1部寄贈しておきます）。因みに林洋武氏は、東大経済学部大河内ゼミ出身で、広い意味での（私の学部ゼミ－隅谷三喜男先生、院ゼミ－氏原正治郎先生は大河内先生の弟子）私の同門後輩の関係で私は彼との知己を得、この冊子を頂いた。そして、この冊子で毎年の市川正一碑前祭のことを知ったのである。

碑前祭参加の予習として『獄中から 心優しき革命家・市川正一書簡集』（1995 新日本出版社）を読んだ。収録された獄中書簡213通の最後は1944年12月23日に末弟三井英雄にあてたものだが、その末尾の行は「英雄さんはなかなか多忙だろう。桐生の方へでも私のことを頼んで下さい。健在をいひります。さようなら。」であり、私が小学校5年から高校2年まで住んだ桐生（赤馬通信2号参照）の名が登場する。えっと思った。市川の次弟義雄は左翼出版社希望閣の経営をやめ、株屋勤めを始めることで獄中の兄から批判されるのだが、その義雄が桐生に住んでいたのである。私は小学6年、敗戦の年の秋、桐生市本町通のみすずや書店で「赤旗（せっき）復刊第1号」を買うのだが、みすずやがそういう販売を行ったのは、その本屋の家に羽仁五郎が疎開していたかららしいということを知った。敗戦直後の桐生での共産主義運動には、市川義雄も関係していたのかもしれないと今思う。いろいろな縁があるものだ。

(2002/03/29)

ほぼ半世紀前、私は通学する大学生だったが、桐生高校の先輩・同輩を訪ねて、あるいは全学連機関紙『祖国と学問のために』の購読勧誘などで、学生寮（東大・駒場寮）の部屋に入ることがしばしばあった。寮の殆どの部屋の誰かの書棚（大体みかん箱かリンゴ箱）に、青い装丁の岩波・新書版『河上肇 自叙伝』があった。いま私の手元にある岩波文庫版第一冊（1996年10月一刷）の解題によると、その新書版五冊は、52年の6—10月に発行されたものだ。私は、その52年の春、破防法反対闘争と血のメーデーで揺れる学園に入学したのである。だが私はその新書版『自叙伝』を読むことがなかった。多くの人が競って求め読む本は何となく読み損なうという私の性癖の一例である。下関で働くことになった60歳代後半に漸く『自叙伝』を読む。下関市大同僚の山本興治兄が演習で河上肇をとりあげ、岩国に現存する河上肇の生家を訪ねるというゼミ旅行を組織した折に、便乗させて頂いたのが縁である。

河上生家は、いま甥の河上荘吾さんが住む形で、守られている。その荘吾さんが「自叙伝は食べ物のことがいろいろ書いてある本だと言う人が親戚の中にいるんですよ」と語る。たしかに、天皇制ファシズム下の苛酷な話しが綴られる『自叙伝』には食べ物の話しがよく登場する。この点、濟州島蜂起一大虐殺という深刻なテーマの金石範『火山島』（全七巻 文芸春秋刊）にしばしば島独特の食べ物が登場するのに似ている。もっとも、金の場合は強い酒の酔い醒ましに口に運ぶ豚の子宮の刺し身（フェ）といった類のやや恐ろしい料理が描かれているのに対し、河上の場合万人向きの甘いお菓子が出てくることが多い。たとえば「同君は当面の用談を済ますと直ぐ座を立った。その時、夫人の郷里である山口から送って来たのだといって、山口名物の菓子『舌鼓』一箱を土産に置いた。同君はこんな物をさげて来た自分の気分を悠長なもののように感じ、場所柄不似合だと思ったのだろう、何か悪いことでもするように言訳を繰返した。こんな地下にもぐっていながら、あの甘い山口名産の『舌鼓』を口にするのは、私が喜ぶことであるのに相違ないのに、なおかつ気をつかっている友人のデリケートな感覚を、私は余りにも行届き過ぎだもののように感じた。」（文庫版第一冊325頁）ここでいう「同君」とは、戦後に日ソ親善運動に尽力される堀江邑一氏だ。

京大・河上肇のもとで経済学を学んだ堀江氏は、当時、高松高商教授。上掲の河上隠れ家訪問は、私の生年と同様、1933年の正月、河上検挙の四日前の九日だ。堀江もその八月に上海の東亞同文書院構内で香川県特高に検挙され、高商に辞表を出すという展開になる。堀江自身の上掲出会の場面の描写は以下のごとくで「舌鼓」は登場しない。「自分は久々で先生と二人の夕食をすませた後、日が暮れてから辞去したのであるが当時自分は近々支那に向かうことになっており、自分の前途にも何が起こるか分からぬことだし、先生のお身の上こそは明日をも計り得ぬ危険な生涯にいられたこととて、その時の師弟の離別の情は全く言語に現し得ないものがあつた。」（大崎平八郎編集『堀江邑一先生を偲ぶ』75頁）

さてこの「舌鼓」は、山口・湯田温泉の中原中也記念館の斜め向かいにある山陰堂で、今でも製造販売されている。つい先頃まで「舌鼓添へて寒さの見舞かな 満州 風外」といった俳句などを掲載して、戦前に東京、朝鮮、台北などにまで、広く購入者がいたこと分かるピラが添えられていた。新横浜から博多に行かれることがあつたら、途中、小郡で一列車遅らせれば新幹線駅構内売店で（つまり途中下車をせずに）購入できます。是非！（02.06.02）

私の職業生活は、当時世田谷の祖師谷にあり、現在川崎の宮前区菅生にある労働科学研究所で始まった（1958年～）。その後、横国大、九大を経て、足掛け5年前から下関市立大学学長の仕事に就き、現在に至っている。最初の職場と、現在の職場で、共通の点がある。毎日出勤するということだ。労研ではよく遅刻して、先生だった藤本武さん（去る6月9日に90歳で没）に折々叱られた。現在は、学長公舎から関門海峡対岸の戸畑・新日鉄製鉄所、八幡・皿倉山を眺めながら坂を下って5分で学長室到着、9時にはデスクに座って稟議書の閲読捺印を始めメールを開けPCを叩くという日課開始である。専任の秘書はいない。

学長は学長室デスクに悠々と座っているだけの人というイメージがあるらしく、友人から「忙しいのですか」と訝るような質問をされることが多い。隣の東亜大学山崎正和学長は、月に一度、芦屋のご自宅から出勤され、数日下関に滞在という勤務ときく。中央政官界の要路の人に会うとか、学内のごく重要事項につき重みのある言葉を発するだけで十分の重量級の著名看板学長なのだろう。同じ「学長」という名前でも、私は軽くセカセカと忙しい。

市議会前議長が「人格不高潔で学長に相応しくない。市長は学長の思想信条を律せよ。」と言い、現議長からは「お前は共産党だろう。白状しろ。市議36人中33人は学長辞任を願っている。辞めろ」と初対面でいきなり言われた立場にある学長という点では緊張する場面も多い。逆に私のファンになって折々学長室にみえられ、中には妻とともに食事に招いてくださる市民もいる。自由と民主主義が国是の国で、学長として大学のあり方について、社会学者として社会のあり方について発言しなくてどうすると公言し、できる範囲でその線で実践してきたわけだから、敵も作ったが味方もできたというところであろうか。

日の丸事件の経験から「刺すという人以外は誰とでも会う」を原則としている私を訪ねて学長室にはさまざまな人が来る。電話もかかってくる。驚くのは、商品投機などマネービルのセールスの電話が多いということだ。その種の業者にとって格好の顧客層になっている種類の学長もいるというわけなのだろう。金沢のいくつかの私大学長が、石川県出身の文教族政治家でもある森前総理に政治献金をしていたスキャンダルが暴露されたことがあったが、その種の人々の学長の仕事と私のそれとは全く違う。私は市民運動社会運動活動家とはよく会うが、政界要路の人物と会うことはまずない。

さて、集まりでの学長挨拶は、学生サークルのメディアへの挨拶執筆と並んで、学長の日常の仕事の重要部分を構成する。以下に掲げるのは、8月3日に行われるオープンキャンパスでの学長挨拶「三つの挑戦」の原稿（約2000字10分相当）である。

「下関市立大学によくいらっしゃいました。今日一日しっかり観察し、参加し、また尋ねて下さい。そして市大が「いい大学」であると確認され、本学入学の志をたててその志を来春までに成就されんことを、熱烈に期待いたしております。

本学は研究所と大学院を持っているので university を名乗っていますが、経済学部のみ単科大学という点では college です。複数学部にする構想は過去に何度か立てましたが、流行りの地方「行政改革」のターゲットにされて、構想が挫折しているのが現状です。

しかし、私が皆さんにお話ししたいのは、本学の小ささ、貧しさを埋めようとする大学自身の熱烈な挑戦の姿です。知恵と努力で課題に挑戦する伝統的姿勢が「公立大学のいい大学」

としての市大の暖簾を形作ってきました。その姿勢の事例として、この秋にやってくる三つのことへの、私のあるいは私たちの挑戦をお話しいたしましょう。

第一に、授業料値上げの問題です。国連「経済・社会・文化的権利国際規約」13条の述べる教育機会均等のための高等教育無償化の先進国趨勢に逆らって、日本政府は1970年代半ば以降、ほぼ隔年に授業料、入学金を値上げしてきました。下関市立大学を含む殆どの公立大学もそれに随行してきました。しかし近年の規制緩和や構造改革の経済政策は、その必然的結果として、業者の事業や労働者の生活の困難の度を増大させました。子弟の高等教育費負担が限界に達して支弁不能となる痛恨の事例を私たちが繰り返し認識させられるこの頃です。加えて、今年度の市大財政は、授業料値上げ増収分を大学経費に充当しないという厳しい構造になりました。6月13日開催の教授会で、私たちが授業料値上げに反対する文書を採択した所以であります。7月12日の市と大学との協議の場で私はその趣旨を縷々説明いたしました。今日8月3日には授業料値上げ見送りの朗報が伝えられるようにとお願いもしたのです。残念ながらいまのところ朗報はありません。「大学の自治」とは言いながら財政的権限が大学には一切無い現状では、ひたすら大学設置者たる下関市に対して要求あるいは請願することしか大学にはできません。それでもこの挑戦はし続ける所存です。成就できないことがあるからといって挑戦を止めることはいたしません。

第二に「世界を目指す大学」として本学が重視する教育・研究における国際性の一つの実践として、今年11月12日（火）午後に本学を会場として「第2回下関市立大学国際シンポジウム」を開催する挑戦を紹介いたしましょう。第1回国際シンポは3年前に「経済危機と21世紀の東アジア」をテーマに、本学との交流校、中国・青島大学と韓国・東義大学校から研究者を招いて、東アジア3大学シンポとして開催されました。その第1回シンポに対しては、下関市は開催の意義を認め予算的措置をとりました。しかし、今回は市財政悪化の進行が反映され、予算要求は認められず、中止が大学に指示されました。私たちは、財政権限が市にあるとはいえ、シンポ、ゼミ、研究会の開催権限は当然ながら「大学の自治」の範囲と解して、資金を外部の篤志家から拠出して頂く形で、第2回国際シンポを「国際化社会の中での日本語教育」をテーマに開くことを決定し、いま準備を進めています。参加大学は、東アジア3大学にオーストラリアの本学との交流校、クイーンズランド大学とグリフィス大学を加えた環太平洋5大学の形となります。市民に開放して行われますので、どうぞ参加して「世界をめざす」下関市立大学の有様をみてください。

第三に「地域に根ざす大学」としての実践です。年々話題をよぶテーマ設定のもとに行われる夜間の市民大学講座、昼間の教養総合講座など、市民の生涯教育機関としての機能発揮や、産業文化研究所が北九州大産業社会研究所と連携して行っている「関門地域研究」などの王道に加えて、留学生と地域住民とのさまざまな交流などたくさんの実践ルートが形成されています。今年の9月1日には、さらにもう一本の地域連携の道がつけられようとしているのです。本学正門から坂を下って左折、500メートルばかり行ったところに、大きな前方後円墳を社域に含む生野神社があります。そこで恒例の行事、風鎮祭で踊られる八朔踊りに学生、教員も加わって踊ろうという企画です。八朔踊りは平家踊りと対抗する伝統の踊りで、保存会が組織されています。その保存会の皆さんに踊りの講習をやって頂き、私も参加しました。入るに易いが極めるのは難しいといった感じの踊りです。どうぞ、下関市立大学の留学生などと一緒にこの踊りの輪に加わってください。私も浴衣を着て踊ります。」

(2002.07.30)

「共和国」（朝鮮民主主義人民共和国）について 1960 年代に私が抱いていたイメージは、次々と抵抗者たちを絞首台に送る南の朴ファッショ政権の暗さと対比的に、朝鮮戦争による破壊から「チョンリマ・千里馬」の速さで社会主義建設を進めるすばらしい国家というものだった。ただしっくりしない気持を持った記憶もある。「共和国」物産展的なものが東京上野のどこかで開かれ、観にいったところが、金日成の白い大きな彫像を赤い絨緞の上に置く特別室様の場所があり、衛兵の制服を着、白手袋をはめた青年が二人、直立不動の姿勢をとっていた。第二次大戦中の天皇崇拜、あるいは新興宗教のカルト的な雰囲気は私は感じた。

その後 80 年代以降『凍土の共和国』（巫紀書房）を初めとして共和国の内情を暴露する書物が次々と刊行され、他方、金日成の神格化も極まって、彼が創始したとされるチェチュ・自主思想（「人民大衆の自主性を実現するための革命思想」92 年憲法 3 条）が「宇宙を貫く原理」であるとか、その思想以外の何ももの知らない（さまざまな思想を知った上でその思想を選択したということでない）のを美德と讃えるような、「共和国」の公的文献を読む中で、私のイメージは変わっていった。ラングーン事件や大韓航空爆破事件がそれに重なる。現在の私の「共和国」認識は、大量餓死と強制収容所（「10 余の政治犯収容所に 15 万人以上の政治犯」『カルメギ 45 号』13 頁 <http://homepage1.nifty.com/northkorea/karume45.htm>）の専制国家というものだ。ソ連が「歴史的巨悪」だったのなら「歴史的矮悪」とでもいうべきか。国家機関としての特殊工作部隊によって、約 70 人に及ぶ日本人拉致事件がおこされたのは、その「悪」の一端にすぎない。1959 年 12 月 14 日に新潟港をその第一船が出発した帰国船によって「共和国」に渡った日本人妻を含む約 10 万人は、実は拉致の第 1 陣だといえるのではないが、その中の相当数が消息不明、あるいは処刑や虐待による死亡である。

ところで、小泉首相が突如「共和国」訪問というかたちで、支持低迷からの離脱を図ろうとしたのはなぜなのだろう。日朝首脳会談は、二正面作戦の世界戦略を断念したアメリカが極東で一時的デタントを作って、イラク攻撃を行おうとする動機に発している（イラクが全面査察受け入れを突如表明したのはその傍証）というのが私の考えである。動機はどれであれ国交回復に向けてのルートがつけられたことはよいと思う。拉致問題は、国交交渉としてやるべきだ。チェチュ思想信奉の日本人がご馳走招待旅行で「共和国」を訪ねるのではなく、国交回復してふつうの人々が「共和国」と日本を自由往来するようになって強制収容所が解体されないということはあるまい。そう願う。

いま懸念されるのは、近年の日本で横行著しい極右思想が拉致事件で一層勢いづき、その排外的思想に日本の庶民が動かされることである。拉致というなら日本帝国主義の徴用による強制連行や慰安婦動員で拉致された 90 万人の朝鮮人たち（うち慰安婦 10 万人余、原爆被爆者も多数）がいたことを忘れてはならない。そのような歴史的文脈の中に今回の拉致事件を置いて、それを相対化する一つの醒めた目が必要だ。

80 年代の後半以降、フィリピン、韓国、台湾、インドネシアとアジア「民主化」過程が進んだ。数十年、政治体制が構造的に変わってないのが、日本と「共和国」だ。今回の日朝首脳会談で糸口をつけられた国交交渉が国交回復に結実し、さらにそのことが両国の一層の「民主化」に展開してゆくことを改めて切願するものである。（2002/09/27）

11月22-25日、5回目の韓国旅行をした。韓国1回目は、97年に目黒区職青年部の活動家たちと、独立記念館、南大門刑務所跡（治安維持法で何人かの死刑執行もされず、死刑判決を下した日本人裁判官の名も抵抗者として絞首台に登った朝鮮人の名も周現甲一名を除き私は不知。知りたい!）、景德宮（1895閔妃暗殺現場）、パコダ公園（1919.3.1運動勃発地）などを訪ねた。昨年2月には、下関市大交流校であるプサン東義大学の招待で玄界灘を渡った。98年秋と昨年秋には、福岡県自治体問題研究所主催「日朝の歴史を訪ねて」シリーズの1回目（慶州）と4回目（済州島）に参加、そして今回はその5回目への参加だ。

今回の旅を、私は朝鮮における日本帝国主義の始点と終点を現認する旅と理解した。江華島は13世紀のモンゴル侵入に対して高麗王朝が40年立てこもって抵抗した拠点でもあるが（王家は降伏して首都開城に戻るが、抵抗部隊=三別抄は珍島、さらに済州島に籠って「モンゴルの日本への侵攻を選らせた」（『地球の歩き方：韓国』）と言われる激烈な抵抗を続けた）、日本が1875年イギリス製軍艦雲揚号を使って侵略の第1歩を印した場所でもある。

江華島と金浦半島の間は狭い海峡になっていて北上すれば漢江（ハンガン）に至り、さらに途中でイムジンガン（源流は北の「共和国」と分かれて溯れば、首都ソウルに到着する。雲揚号は朝鮮半島の西海岸を測量しながら北上して、海峡の入り口の砲台の近くに接近するという挑発行為を行い、草芝鎮（チョチチン）という砲台から砲火を浴びせられた。この事件に先立って、フランス、アメリカが開港を要求してこの海峡で侵略戦を行い、撃退されている。海峡兩岸には、多くの砲台陣地が連なるが、私たちは草芝鎮を含む三つの場所で、三つの帝国主義の爪跡に触れたのである。

海峡の風景は関門海峡に似る。1864年に長州藩が4カ国を相手に戦った下関の前田砲台は今、草むらの中であるが、我々が見学した要害は朴大統領の民族主義高揚政策の下に歴史公園風に良く整備されていた。馬関戦争敗北の後、明治維新を挟んで10年余にして、日本が朝鮮に軍艦で迫って開国させた（1876江華島条約）という転変の激しさは凄い。実は、長州藩は攘夷攘夷と言いながら、馬関戦争の前年に伊藤博文、井上馨ら5人の青年を5千両もかけて密かにロンドンに留学させている。攘夷思想は、関が原以来の徳川への怨念を晴らすための方便だった。だから馬関戦争後、開国の旗に簡単に代えられたのだ。現在、萩に神様として祀られている吉田松陰の「国力を養い、取り易き朝鮮、満州、支那を切り従え」る（友人宛書簡）という思想を明治から昭和にかけての日本政府は実践した。それは遂には、アジアから太平洋に拡大する戦争の道であり、1945年8月15日で止めを刺される途であった。

日本敗戦で朝鮮は解放されたが、半島は米ソ二つの占領分担地域に38度線で分断された。1948年の南鮮単独選挙→大韓民国成立、それを追っての北鮮での「共和国」成立は、38度線を国境に変えた。48年4月3日に始まり、30万島民中8万人が殺害された済州島蜂起の主体は、大韓民国建国に反対した反逆者達とされてきたのだが、分断国家成立に反対した愛国者達なのである。50年6月25日・朝鮮戦争勃発以降の転変は、国境の線引きをS字状に歪めるとともに分断の深刻さを深めた。私たちの観光バスが江華島と金浦半島の北の国境近くで、二度も（古代のドルメンを訪ねる途と昼食レストランに行く途とで）完全武装の韓国海兵隊によってUターンさせられるという異常経験をしたごとくである。（2002/11/27）

「吉野川可動堰反対の住民運動が生んだ大田正・徳島県知事のもとで、次のようなことがおきた。前知事の汚職腐敗に本格的メスを入れるため、昨年九月県議会に新知事が第三者機動的「汚職問題調査委員会」設置のための予算一千万円を提案したところ、自民・公明（前与党＝新野党）の多数会派がこれを削除する形で予算を通したのである。このような議会に対して県民の中から「議会が否決するなら私が」と「預金通帳とハンコを持って」次々と大田知事を激励することが起きた（以上は「赤旗日曜版」02年12月1日3頁による。私は党派の新聞でも事実を報ずるし、一般紙あるいは商業紙が重要事実を報じないこともあるとふだん考えている。以上の報道は事実と受け止めた）。

この顛末と、下関市大第二回国際シンポ開催（02年11月12日）の経緯はかなり似ているところがある。韓国、中国、オーストラリアの本学との交流校四大学がすべて日本語の教育研究部門を持っている点に着目して「国際化社会のなかの日本語教育」をテーマに国際シンポを開催すべく予算要求をしたところ、それが全く認められなかったばかりか予算はつけないが「一般管理費」（年度当初では具体的予定がなかったイベントで小さい金額のものはこれで実施するのが通常）でやれとする途中査定を取り消して、シンポを中止せよとの最終査定をくらった。授業料を下回る規模での歳出予算決定という総額規制とシンポをやるなどの使途規制、いずれも下関市大の歴史に画期的なことであった。この予算が市議会で修正されるということも起きなかった。このまま首をすくめて市大ジリ貧の過程をやり過ごす以外にないのか。私は悩んだ。

公費が支出できないなら外部資金を動員してでも国際シンポを是非やらねばと決意して、まず同窓会にアピールしようとした。しかし「市長によく事情をきいてから」とのことで醸金要請には応えて頂けなかった。夏に東京で行った総会には、市長が出席して「市大のますますの発展を願う」とのスピーチを行うという同窓会初めての場面があり、秋には同窓会幹部と市長との懇談の場ももたれたらしい。これらを経て刊行された同窓会機関紙「ミネルヴァ」で同窓会長は次のように語っている。「大学の運営は市長と学長の信頼関係の上に成り立っています。母校が現在の姿になるまで、歴代の市長は父親、学長は母親のようにあたたかく育ててきたわけです。両親が夫婦喧嘩をして、子供はどちらにつくかと言われても、答えはありません。」

同窓会が組織的に支援してはくれないとなって私が頼ったのは、顛原俊一氏である。氏とは年に一回、彼が醸金して作った奨学金制度の基金運営委員会でお会いするだけの薄い関係であったが、あえてお願いに伺った。百万円の寄付をしてくださった。まことに嬉しかった。その勢いで私がこれまで付き合い声を交わした市民諸個人、同窓会幹部諸個人、そして当然ながら同僚の教員諸兄弟姉にもカンパを依頼した。結果として、顛原さんのほかに70名近くの方が合計約30万円を寄せて下さった。かくて国際シンポは、関連の交流懇親行事を含め、好評のうちに終わることが出来、現在、報告資料集の刊行を準備している運びである。下関市立大学を支援する志をもった市民の方々の力でシンポジウムを開くことができた。市大は市民立の大学であるとの特徴を強めたと思う。そのことを改めて喜びたい。また力を貸して下さった方々に改めて御礼を申し上げる。（『下関の行動と言葉をつなぐ 海』79号より転載）

今回タイトルは、作家・池澤夏樹のメール・コラム「新世紀へようこそ」98号「戦争が始まった」(3月20日)の文末文章の引用である。『赤旗』(3月23日)からの孫引きだ。私も、この『赤馬通信』の欄を借りてアメリカのイラク戦争に反対する文章を綴りたい。

ちょっと前に、ビデオ屋の西部劇の棚からアメリカ映画『ジョロニモ』を借りて観た。全労協系の全国一般労組＝ユニオン北九州のニュース(43号)が「歴史に学ぶ“団体交渉術”北米アパッチ族の英雄」との題目で紹介するのに興を引かれてである。それに「フレンチコネクション」でマルセーユを走り回るアメリカ人刑事を演じたジーン・ハックマンや、「ゴッド・ファーザー」でファミリーの知的番頭役をやったロバート・デュバルといった好きな俳優が出ているということもあった。自由とか平和とかの美辞を述べながら冷酷な殺害行為を行う現在のアメリカの世界帝国ぶりは、19世紀の国内インディアン狩りからつながるものだと感じさせる場面が折々に描かれる。最後のクレジット・タイトルは、投降したジョロニモらのアパッチ戦士をフロリダの収容所へ送る列車の風景と共に流れて行く。この西部の荒野の描写が素敵だ。画面の左側を列車は煙を吐きながら手前からずっと奥の方へ次第に小さい像になりながら走っていき、はるか遠くなった所で右に曲がって画面を横断する姿になる。私はこの列車の線路の行き先に1945年3月10日の東京、8月の広島、長崎、そして朝鮮戦争時の平壤、ベトナム戦争時のハノイ、さらにアフガン、イラクをイメージした。

平壤やハノイの空爆を基地提供で支援した戦後日本の支配者は、いままた給油や情報提供を行う軍艦をペルシア湾に送ってアメリカの軍事作戦を支援している。彼らは国内の反戦運動の高まりを洩面で見ながら、有事立法での取締りを構想しているのである。

マスコミはそうした支配層の意識を基調にしながらかし反戦の庶民意識も時には折り込んでの報道姿勢だ。NHKの当局御用的姿勢が著しい。「フランスはかたくなな姿勢を変えようとしてません」と言ったアナウンサー。イラク武力攻撃の姿勢を変えようとしないアメリカはかたくなではないのかと反発していたところ、イラク攻撃を批判する『毎日』の論評でも「フランスや中間派6カ国のかたくなな姿勢も「誤算」だった」との表現が使われている(3月21日「なぜ今…イラク攻撃と世界4」)のを見た。『毎日』22日夕刊はトップ見出し「本格空爆 イラク政権崩壊の兆し」の記事本文で「フセイン政権は自壊の兆しも見せ始めた」と書く。空爆による崩壊は「自壊」ではないでしょう！

他方、こういうこともある。春分の日、萩往復ドライブの折りにクルマの中で聞いていたFM山口放送が「春ぢゃねー」との山口弁(男女共通の表現 このぢゃはぢゃとぢゃの中間音で発音)を頻発しながら流す音楽の中に、桑田佳祐「ロックンロールヒーロー」があった。「今の時期だからこそ、この歌詞が意味することをちゃんと考える必要があると思います」との視聴者の注文に応えての放送である。CD(WJCD0024)の歌詞カードから数句紹介しておこう。「アメリカは僕のHero 安部(まも)っておくれよLeader 国家(くに)を挙げての右習え 核なるうえはGo with you 暗い過去も顧みずに ついて行きましょう 一度は僕らもHero 後は修羅場だ…」しかし「ついて行かない」人のデモが、世界の反戦の流れに沿って今漸くこの日本でも万の規模でそして高校生まで参加する形で行われるようになった。そこで私も再度叫びたい。「戦争が始まりました！戦争に反対しましょう！」(03.03.23)

私と同学の、つまり労働問題・社会政策専攻の友人で、九州のある大学で教員をやっていた人が定年から何年も前にこの3月で退職した。その理由がショッキングなものだった。「生きているうちに本を読みたいから」という理由からの大学教員辞職である。昨今の日本の大学は多事多難で、本が読めるから大学教員になるという常識はもはや通用しない。少なくとも、大学組織の一員として、「改革」課題をそれなりに担おうとする誠実な人柄であれば、次々と出版される内外の文献を読んでいる時間は作れないということだ。

大学は改革されねばならない。しかしそれは、停滞ときには腐朽の、それ自体改革されねばならない民間企業に似せて組織改革を行うことではない。ところが今日現在、参議院で審議され6月18日の会期期限までに成立されようとしている国立大学法人化法案の眼目の一つは、民間企業に似せて大学を変えようとするものだ。学外者（おそらく中央政界、官界、財界の線で送り込まれる人々が支配的となろう）が半数を占める選考機関で選ばれる学長が、日本企業の社長的な絶対権限を振るう仕組みだ。教育公務員特例法で規定されている教員任免権が中軸となる教学権を持つ教授会に相応する規定は無い。

大学の経営形態を問わずに適用される学校教育法59条は「重要な事項を審議するために教授会をおかねばならない」とあるが、学校教育法にはこの「重要な事項」の定義規定を欠き、教授会に教員任免の審議権があるとはされていない。従って、私立大学のかんがりの教授会は従来からずーと教学権を持たず、学長・理事長周辺のトップが教員の任免権を持っている。文部省が推奨するトップダウンの大学運営は、スキャンダルでよく話題になるような私立大学（例えば帝京大学）の従来からの姿であって、別に新機軸の構想ではない。これでは良い大学に成れないとして、世間で権威あるとされる私立大学は、国公立大学と同じように教授会審議を基礎にして大学運営を行ってきたのである。「全共闘」運動が、教授会自治解体を叫んでいた時代に、日本大学や明治大学は教授会に教学権を確立する「大学民主化」を行った。いまの大学法人化はそれとは逆の流れである。現在、大学式典で「君が代」斉唱をやっているような国公立大学は法人化に伴って、世評的に権威のない私学と同様の、教授会に権限のない大学へ容易に「改革」されてしまうだろう。私学でもこの逆の流れがいま始まっている。鹿児島国際大学では昨春、学長が気に入らない人を採用する人事を進めたことが問責されて教員3名が懲戒解雇される事件がおきた。その過程で採用人事のルールを学長専権的なものに変更し、教授会から人事権を取り上げてしまったごときだ。

大学法人化は基本的には独立行政法人の枠組みで行われる。この枠組みの思想は、構想と執行を分離し、一線の現場労働者には考えさせず、ただ上あるいは外から与えられた課題を成果評価に基づく貨幣給付刺激で執行させるだけというテラー主義に酷似している。研究教育労働展開の具体的姿それ自体の内容吟味を教授会にさせずに、大学外から与えた課題の遂行程度を評価して大学への予算配分、教員個人の賃金高低と雇用の安定性を左右する。こんなことで、日本の高等教育は発展するのだろうか。否、という他ない。

以上のことはメディアでは殆ど問題にされていない。企業の採用政策によって4年ゼミなどが成立せず、産業が大学を破壊していることを指弾する声も全くない。財界あるいは文部省当局発表の言い換えジャーナリズムのもとで苦悶している大学に声援を！（2003/05/30）

『毎日』03年6月18日朝刊7頁に共同通信の配信で、スウェーデン・ストックホルム国際平和研究所(SIPRI)の2003年版年鑑に発表された世界の軍事費の数字が報道された。「世界の軍事費、6%増 米がけん引役に—02年」の見出しの小さな囲み記事であった。「米国の軍事費は10%増えて世界の43%に達し、軍事超大国ぶりを象徴」との叙述を「そうだろう」と相槌を打って読んだ次の叙述が「おや?」だった。「米国を含めた中国など上位5ヶ国の軍事費は、世界の62%」とあって、世界2位のはずの日本の名が挙げられていない。翌日の『赤旗』が、1面で「日本の軍事費 世界2位」の見出しで報道(赤旗ロンドン特派員直接の報道)したのと対比的である。反イラク戦争のデモ・集会を、フセイン独裁体制を免罪するものどけなす姿勢での記事や論評を載せてきた最近の『毎日』らしい酷い記事だとまずは憤慨した。そこで他紙はどうなのかと『日経』『朝日』を調べたら、全くの無視で報道なし。それなら、2位の日本の名を挙げず、5位の中国の名だけを抜き出す『毎日』でもまだましだ。日本が世界2位の軍事大国であることは「猫が鼠をとった」的な当たり前のことなのだろう。

『赤旗』の記事にある叙述—日本の軍事支出は「米国に次いで世界で二番目になりました」は誤解を招く。かなり前から世界2位のはずである。そこで、原資料にあたって調べてみた。こういうときインターネットは便利だ。SIPRIにアクセスすると、各国別の年次データは、簡単な利用登録が必要だった。その登録を行ったうえで、収集した統計値が下掲のものである。各国の数字は2000年時点でのドル価格(原資料の100万ドル表示を10億ドル単位に丸めた)換算の軍事支出の金額。

	1988	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02
米:	427	422	404	354	374	354	335	315	298	297	289	290	302	304	351
日:	—	40	41	42	43	44	44	44	45	46	45	45	46	46	47
英:	47	47	46	47	43	42	40	37	38	35	36	35	36	36	36
仏:	38	39	39	39	38	37	37	36	35	35	34	34	37	37	38
中:	—	11	12	13	15	14	14	14	15	16	18	20	23	26	31
独:	38	38	40	38	36	32	30	30	29	28	28	29	28	28	28

これによると、日本は1993年にイギリスを抜いて世界2位になっている。80年代は、日本、フランス、ドイツがほぼ一線に並んでいたのが、東西冷戦終焉以後に各国が軍事支出を抑制する中で、日本はじりじり軍事費を増やして、世界2位の地位を不動のものにした。これが、90年代以来の趨勢である。もっとも、中国はこの表の表示の範囲で3倍化という急増ぶりだ。ここから中国脅威論が生まれ、学生の中にもそういう論壇傾向の影響がみられたりする根拠があることが理解されはする。しかし、変化のテンポはそうだとすると、その絶対水準はアメリカの十分の一にもならず、有事立法成立で日本の軍事力動員が容易になったことを考慮すれば、日米あわせた4000億ドルに対する中国300億ドルで、中国にとっての日米安保体制の方がよほどの脅威というべきだろう。

有事立法成立キャンペーンに使われた北朝鮮=「共和国」脅威論について、同様な批判をすれば次のような数字で行うことになる。SIPRIの「共和国」についての、2000年ドル価格換算軍事費(単位:億ドル)を1998—02年について示すと、13、13、14、15で、韓国(124、121、

128、131、135)の十分の一レベルだ。日米体制との対比では、1%以下でしかない。先制攻撃論を公然と唱えるアメリカ、日本軍国主義の誤りをきっぱり克服していない日本、この両者が「共和国」にとって、どんなに脅威に映っているかということ、我々は考えるべきだろう。ちなみに辛淑玉(シン・スゴ)さんは、この事を次のように表現している—「北朝鮮の国力は、あるシンクタンクの発表によると、船橋市と同じ程度だそうです。世界第1位と第2位の軍事力を保持した国が、船橋市と同じレベルの国に対して脅威を感ずるとは」(『反国労キャンペーンから20年 マスメディアを問うシンポジウム報告集』22頁)。

今年の元旦、「共和国」の「労働新聞、朝鮮人民軍、青年前衛三紙の共同社説」は、「軍事優先の旗じるしに従って国の尊厳と威力を轟かせよう」をタイトルに掲げ、「全人民は軍事を国事中の国事に押し立て、国防力の強化に最大の力を入れるべき」といったアピールを反復強調した。そして1965年の林彪論文「人民戦争の勝利万歳」が太平洋を越えて侵略者に鉄槌を下すと宣言したのを想起させるような叙述まで行った。こうである—「わが人民軍は、帝国主義者が「力の政策」に狂って無分別に襲いかかるなら、予測できない打撃で侵略者を打ち破り、敵の牙城を無慈悲に破壊するであろう。」！！

大量の餓死者を生むような経済再生産の基盤崩壊のもとで、4000億ドル対15億ドルの恐怖の関係を安心できる均衡関係にするためとか考えて、旧ソ連的な対米軍拡競争をなおやろうというのだろうか。そのような途は、「共和国」自滅の途と私は考える。昨年9月の「平壤宣言」が言うところの「地域の信頼醸成を図るための枠組みを整備していく」途をとってほしい。「韓国」の太陽政策に積極的に応えるような政策展開があってほしい。そういう途が日本の反戦平和の運動を激励する力学を構想してほしい。そういうことを今改めて思う。

ところで私は、国家独占資本主義が東西冷戦構造のもとで、欧米においては一面軍事国家、他面福祉国家の形に構造化されたのに対して、日本は非軍事の平和国家、非福祉の産業国家という独自の構造のもとで最高テンポの高度成長を遂げたといった類いの命題を提起してきた。例えば、栗田・下山・菊池『社会政策(2)』(1981年有斐閣新書)の168頁では「国家独占資本主義が軍事と福祉におけるフィスカル・ポリシーを中軸とする体制だとすれば、高成長期の日本は例外的存在であった。憲法における戦争放棄規定に法的根拠をもつ平和希求の国民的理念の根強さは、日本を本格的軍事国家にすることを拒んできた」と述べている。

	1988	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01
米:	5.7	5.5	5.3	4.7	4.8	4.5	4.1	3.8	3.5	3.3	3.1	3.0	3.1	3.1
日:	—	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	1.0	0.9	0.9	0.9	1.0	1.0	1.0	1.0
英:	4.1	4.1	3.9	4.2	3.8	3.5	3.3	3.0	2.9	2.7	2.6	2.5	2.5	2.5
仏:	3.7	3.6	3.5	3.5	3.4	3.3	3.3	3.1	3.0	2.9	2.8	2.7	2.6	2.5
中:	—	2.8	2.7	2.5	2.7	2.1	1.9	1.8	1.8	1.7	1.9	2.1	2.1	2.3
独:	2.9	2.8	2.8	2.2	2.1	1.9	1.7	1.7	1.6	1.6	1.5	1.6	1.5	1.5

軍事支出が世界第2位になった現段階において、同じようなことを言い続けてよいのか、ためらう。上表は同じくSIPRIのデータで、GDP(国民総生産)中の軍事支出の割合(%)である。米英仏独が軍事費比率を減らすなかで、日本は1%レベルを固持して第2位進出ということになったわけだが、1%水準はまだ最低位ではある。しかし、消費税税率比率にならって軍事費GDP比率も欧米なみにとの推力が動く時が来ないとは言えまい。有事立法成立で勢いづいた安部晋三氏(林義郎氏と並ぶ下関出身の全国版政治家)が改めて改憲による「戦後の呪縛からの解放」を言う情勢だ。攻防はまだまだ続く。頑張ろう！(2003/06/21)

2003年6月新日本出版社刊A5・262頁のこの本における労働論を論評してほしいとの梶田かながわ総研所長の注文に応える形で、今回の「あかま通信」を書くことにした。

90歳を越えてなお盛んに執筆を続ける著者の近年の諸論稿を集めた本書が扱うテーマは多様豊富で面白い。「連日の新聞切り抜き」作業も踏まえ、ブッシュ・ドクトリンをアメリカ帝国発展史の中で位置づけるとか、ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』のく「傲慢な植民地主義者」が日本統治の必要上から天皇制護持に策謀をこらした>との私が読後共感したような展開に、日本の為政者の側にいた自身の体験(1947年片山内閣経済安定本部次官として第1回『経済白書』を執筆)を踏まえて「異議あり」と唱えるとか……。水俣病闘争で被害者の側に立った「温かい心」の人と「冷やかな権威主義」の「紳士諸君」とを対比させ「隔絶した人間性貧富のコントラスト」と叙述する観点は本書全体を貫くものでもあり、人間損傷の側に立った人格の実名をきちんと挙げているのも、権力金力の側からの不法不当な行為の被害者が官民権力の走狗になった人々を遠慮して匿名でしか呼ばない情けない状況が結構あるこの日本においては、実に素晴らしい。その実名リストは、サッコとヴァンゼッティの死刑執行(1927 2003年の私は、憤怒を哀感の中に静かに納めた感のジョン・パエズの歌を主題歌とする映画「死刑台のメロディー」を想起する)にゴーサインを出した「三人委員会」のハーヴァード大学総長ロウェルに始まり、途上国の生命の方が安価だからとの理由で「有害廃棄物を最低賃金国に投棄すべきだ」という経済学上の論理には疑問の余地がない」と主張したサマーズ世銀副総裁(1991 2001にハーヴァード大学総長)に至っている。

さて、私が読み取った本書の労働論とは、62-67, 150, 157-162, 219-224, 238-243, 252, 259頁などで展開されており、そこでは20世紀の科学技術革命=巨大な生産力発展に対応する二つの「体制変革」処方箋が提示されている。一つは、マルクス『経済学批判要綱』において「労働者が生産過程の主作用因ではなくなって」素材の富の創造が「労働時間中に動員される生産手段の力に依存するよう」な転換が起これば「直接的形態での労働が富の偉大な源泉であることをやめ」「交換価値に立脚する生産様式は崩壊」と述べた関係(生産力・オートメ→生産関係・社会主義の因果との理解が通説のようだが、私は後期マルクスに依拠して、資本量に応じて剰余価値を分配する生産価格法則に価値法則が止揚される因果と理解したい)に着目するものだ。レオンチェフが1996年の講演で、技術の労働に対する要求が「少なくなるにつれ」「資本財の役割は大きくなり」「資本所得は相対的に増大する」との事実認識を踏まえ、労働者がその資本所得に与かる途を「自治体から得る社会保障給付を使って自分が希望する会社の株を買い、配当を受ける」と提案したことへの共感も示されている。

都留氏の史観は、剰余生産物=サープラスの形態で経済体制の質的区分を行ない、利潤を「マクロ的生産力に比例し賃金水準に逆比例するサープラスの表現」とみる点でマルクス主義的であり、さらにサープラスの処理を「ストックすなわち生産手段の公有化」によって行う前段階として「フローすなわち発生したサープラスの社会化」を行い、それを「社会的福祉の観点から有意性のある配分活用」との政策提起をしている。上掲の中期マルクスが、生産力の巨大化からストレートに社会主義への移行を言うかの如く叙述しているのに対して、都留氏は、生産における市場経済支配を認めつつ所得再分配の社会化による「体制変革」を

説く点で、市場経済を通ずる社会主義化（中国、ベトナム）あるいは資本主義の民主化を通ずる社会主義への移行（日本）を説く現代マルクス主義と同じ立場と理解できる。レオンチェフ提言については「発想は斬新」だが「問題に対する答えとして、まだ中途半端」と述べて、市場によらない剰余再配分の効能を提起した所のみ意義を認めているようだ。

膨大な生産力発展（都留氏の利潤定義からすれば賃金停滞のもとでこれが膨大な剰余発生に結果することは明白）に対する第二の処方箋は、ラスキン「労働の人間化」、モリス「生活の芸術化」、シューマッハー「小は美」などに依拠するところの国民の「ライフスタイル」改変である。フォーディズムにその典型をみるように、技術革新は「手工や頭脳を使う創造的で役に立つ仕事」を「その大部分を全く喜びとしないような分裂された種類の仕事を大量に与える状態」に代えた。それを生産性あるいは成長を逆転させて元に戻すという主張である。シューマッハーの次の主張が繰り返し引用されるごとくだ：現在、生活のために必要な物的生産は社会的総労働時間の3.5%でしかない（人口の1/2が労働力、その1/3が物的生産、物的生産従事者の労働時間は生活時間の1/5として、この3因数を相乗した数値つまり全人口が24時間365日働く状態を分母で計算した数字が3.5%で、過少な印象を与えるように工作した数字と私は理解した）ので、それを20%に引き上げれば「誰もが楽しみで仕事出来る」。

以上の都留氏の認識と政策提案に、以下の文脈のもとで私は賛成だ。まず中期マルクスが言う所の、労働者が「生産過程それ自体に対して監視者ないしは統御者として関係する」生産力段階、つまりオートメーション段階に到達している物的生産分野は未だ部分であり、加工、組立て直接労働に依存している部分が相当残存すること、またオートメ化した部分でも保守修理や事故対応で直接労働に依存せねばならぬ機会がかなり残っていること、これらの認識が一つの留保である。いま日本の経営者の大勢が個人別成果賃金導入に狂奔し、社会政策学会という学術の世界でも、従来の研究の欠落を「個人能力の公正な査定」技法を開発しなかったこととするコンサルタント会社の反省を言う研究者が現れたりしたりしているのも、生産成果は緊密な協業の結果で個人別には殆ど分解できぬとはいえ、その集団成果は個々の労働者の直接労働に未だ相当程度依存しているからだと私は理解している。

なおマルクスの上掲命題に関しては、産業革命＝機械制大工業が資本主義を生み、オートメーションが社会主義を生むといった故・中村静治氏を典型とする議論に触れておく必要がある。オートメ的生産力を持たないで社会主義化を強行したのがスターリン、毛沢東の必然的誤りであり、十月革命や新中国誕生は早産だったという議論である。こうした議論に対して私は<産業革命が市民革命＝ブルジョア革命に先行されたように、社会主義への移行はやはり政治革命が先行し、その成果＝新権力が意識的計画的にまずは剰余のフローの改良、次いで国権の徹底民主化とセットになった国有化を含む諸段階の公有化によるストックの社会化を進めることで社会主義に段階的に移行していく>と主張する。

生産力ダウンで創造的労働の世界へという主張には、マルクス、エンゲルスの「労働の未来」についての二様の主張を二元的展望と読んで、そこからの条件づけをしたい。つまり、単調反復、静止強制、心身部分行使などの現代的労働のかなりのものについては、昔の仕事の仕方に戻るのではなくて、徹底した時短で対応すべきだ。他方、分業の止揚は、拡大した余暇生活において、また医療や教育などの非物質的生産のもとで、それぞれ追求実現さるべきである。技術革新が医療分野ではむしろ高コスト化に結果したとの都留氏の指摘は、その分野の労働態様を効率よりも人間の心身補修や発達目的優先に代えることで高コストの労働に代える政策に延長できると考える。(03.10.14)

マルクス(1818-83)は生涯の著作の中で、労働についてさまざまに論じている。いずれも興味深い展開だが、かなりユートピア的で私がついていけない命題もある。例えば「ドイツ・イデオロギー」(執筆1845-46、公刊1932)における「分業の止揚」や、「経済学批判要綱」(1857-59, 1939-41)が説く所の科学技術の発展により「労働が富の偉大な源泉」でなくなり富の創造は「生産手段の力に依存する」ようになるといった命題である。都留重人氏は本通信前号で紹介したようにむしろ私と逆で「科学技術の発展」と「分業の止揚」によって現代の「体制変革」を展望していた。私は「資本論3巻」(1885)7篇での展開、すなわち非人間的労働が人間的労働になってもそれはまだ「必然性の王国」であり「真の自由の王国」は徹底した労働時間短縮で生まれる自由な生活時間の中で開花するとの展開にむしろ納得する。「ドイツ・イデオロギー」が言うような「午前に狩、午後に釣り、食後に哲学」などといった分業の止揚はいくら社会が発展しても到来せず「ゴータ綱領批判」(1875, 1890-91)が説くような「労働が生活の第一欲求になる」高度な共産主義社会は夢想の世界と考える。また、いくら科学技術が今日、発展したとはいえ、日本の就業人口650万×年間2000時間=130億時間の労働がもはや富の源泉ではないなどとは到底言えないのである。

その点、1844年にパリで書かれた草稿における「労働疎外論」は、そのヘーゲル流の難解な表現にも拘らず、「資本論」1巻(1867)の後期マルクスにおける明快な労働論にかなりつなげることができ、したがってまた現代的意義も大きいと思う。

「疎外」の語は日常語ではないので、多少の国語辞書の説明をまず行っておく。それはドイツ観念論哲学の系列(そのピークはヘーゲル1770-1831)の中で生まれた概念で、自己から内発的に生まれるが、その産物が自己を否定し自己と対立するような関係性のことである。マルクスは労働を、まずは積極的な知力体力の発現であって、自然を人間に有用な形に変革し同時に自己の知力体力をも発達させる本来の人間行為であり、かつまたそれが協業分業という社会関係のもとで行われることから人間の共同性が確認される場であるととらえる。古典派経済学のピークであるアダム・スミスが労働を *toil and trouble*(労苦)ととらえ、その思想の延長上で労働を非効用(*disutility*)と置いて、所得の効用とその非効用が等しくなるポイントで労働時間が決まるとするような近代の経済学分析における労働把握とは対極的な把握だ。だがその上で、マルクスは資本制社会においてその本来の人間労働が非人間的な「労苦」となり人間破壊的なものに転化することを「疎外された労働」として定式化した。

この定式化は、例えば三つの手稿から成る「1844年の経済学・哲学手稿」第一手稿の最後の部分で次のように総括されている。「人間が彼の労働の産物、彼の生活活動、彼の類的本質から疎外されていることの一つの直接の帰結は、人間の間人間からの疎外である。人間が己れ自身に対立する場合には、彼に彼ならぬ他の人間が対立する。」労働生産物からの疎外、労働そのものからの疎外、類的存在からの疎外、人間からの疎外の四つが言われているわけだ。これらのうち第四のものは、前三者を総括しての規定らしいが前三者に加えて何か独自な実体があるのかどうか、私にはよく理解できない。初めの二つは「資本論」1巻3篇の労働過程論で「資本家による労働力の消費過程として行われる場合」の「二つの独自な現象」として明快に、ただし順序が代わって、継承されている。第一には、労働は「資本家の管理

のもと」で行われ労働者の主体的行為でなくなっているという叙述だ。「第二に、生産物は資本家の所有物」との叙述がそれに続く。叙述の順序をどうするかの問題は科学にとって極めて重要なことなのだが、初期マルクスの「疎外論」の序列と、後期マルクスの「労働過程論」とで、生産物からの疎外と労働そのものからの疎外が逆転した理由についての私の理解はこうである。初期マルクスではヘーゲルの疎外論を引きずって、まず主体が外化して生産物となるところから考察を始めているのに対して、後期マルクスのもとでは、労働の「全過程を、その結果の、すなわち生産物からの立場から考察するならば・・労働そのものは生産的労働として現れる」と考察し、「因」の労働が「果」の生産物を生むとの序列になった。

ところで疎外の第三、類的存在からの疎外は「資本論」からは消えてしまっている。それはこの疎外第三形態が資本―賃労働の関係からくるというよりも、商品生産による市場関係に規定されているからだ。このことを理解するには類的存在からの疎外の具体的中身を理解する必要があるのだが「経済学・哲学手稿」における叙述は、その点極めて分かりにくい。というより私には分からない。1844年のもう一つの草稿である「ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』からの抜粋」によって初めて私は理解ができた。そこでは「私の生産物を君が享受したり使ったりするとき」「君自身が私を、君自身の本質の補完物、君自身の不可欠の一部分として知りかつ感じてくれており、したがって君の思考の中でも愛のなかでも私を確証していることを知るという喜び」を味わう関係が人間的生産として定立されている。他方、次のような国民経済学批判を展開する。国民経済学は「人間の共同的本質を、いいかえれば自己を確証しつつある人間本質、類的生活・真に人間的な生活のために人間が相互に営む補完行為を、交換ならびに商業という形態でとらえている。・・アダム・スミスはいう。社会とは商業社会であって、その成員はすべて商人である。・・交換の関係が前提されれば、労働は直接的な営利労働となる。・・略奪・瞞着の関係が背後に潜んでいるのは必然である。」

競艇で儲けて世界的慈善を行い、ノーベル平和賞を狙ったが叶わぬままに亡くなった極右の首領＝笹川良平氏が生前自ら出演したCMに「世界は一家！人類みな兄弟！戸締り用心！」というコピーがある。上記の類的存在からの疎外論を知って聞くと、絶妙な文句だ。市場関係を通じて人類は世界的に結合する、しかしその関係は売って貨幣を私有すればそれでオシマイサヨナラという関係で、他人に対しては「戸締り用心」で対応せねばならぬわけだ。

ところで、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（1937）は、日中戦争勃発の翌月、天皇陛下万歳！大和魂發揮！といった非合理精神が支配的だった時代に発刊され、少年たちに合理的科学的思想を伝えようとした素晴らしい著作である。太平洋戦争開始以降は刊行できなくなったが、戦後再び広く読まれた。気の利いた社会科教員のいる中学高校で学んだ人はほぼ必ず読んだはずの本だ。この本の主人公、中学2年のコペル君が発見する「人間分子の関係、網目の法則」は、以下にみるように実は価値法則＝市場関係による人の結合だ。コペル君の発見「粉ミルクが、オーストラリアから、赤ん坊の僕のところまで、とてもとても長いレーをやってきたのだと思いました。工場や汽車や汽船を作った人まで入れると、何千人だか、何万人だか知れない、たくさんの人が僕につながっているんだと思いました。でも、そのうち僕の知っている人は、前のうちのそばにあった薬屋の主人だけで、あとはみんな僕の知らない人です。むこうだって、僕のことなんか、知らないにきまっています。僕は実にへんだと思いました。」これに対するおじさんのコメント「・・時代が進んで商業が盛んに行われるようになり、世界の各地がだんだんに結ばれていって、とうとう今では、世界中が一つの網になってしまった。・・君にとってなくてはならないものを作り出すために、実際に骨を折ってくれた人々と、そのおかげで生きている君とがどこまでも赤の他人だとしたら、たし

かにへんなことだ。・・そのつながりは、まだまだ本当に人間らしい関係になっているとはいえない。だから、これほど人類が進歩しながら、人間同志の争いがいまだに絶えない・・」

この本は1982年に岩波文庫版として復刊された。それに付された丸山真男の「回想」（1981執筆）に「・・「人間分子の法則」の足りないところを補いながら、「生産関係」の説明にまでもってゆくところに読み進んで私は思わず唸りました。これはまさしく「資本論入門」ではないか」とある。この丸山の評価に私は不満だ。商品市場関係も確かに「生産関係」である。しかし、資本論の本論で扱う「生産関係」は、資本—賃労働の階級関係であり、吉野本では扱われていない。貧困の現象は描かれるがそれを「生産関係」にもってゆくことはしてないし、市場の網目による人間関係が「人間らしい関係になっているとはいえない」ことも宣言されているだけで、描写も分析もない。天皇制=国体批判は死刑、私有財産制=資本主義批判は無期懲役という治安維持法で脅かされていた時代の著作としては当然だ。戦後、読む場合には絶賛に終始すべきではないだろう、そう私は思うのである。

スターリンが例のスターリン論文（「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」1952）で「価値法則は資本主義の基本的経済法則ではないのか？いや、そうではない。・・資本主義の経済法則の概念になによりもよく適しているのは、剰余価値の法則、資本主義的利潤の発生と増大の法則である。」と言った命題は、彼の悪行にも拘らず真理である。価値法則は、資本主義の基礎法則であるが、基本法則ではないと私はいまも考えている。だから、私有財産制のもとでの社会的分業が生む生産関係=価値法則に加えて、直接生産者の人格的自由と生産手段からの自由のもとで起る労働力商品化が生む生産関係=剰余価値法則の展開を今日の日本で確認することが「資本論入門」としては不可欠であろう。

生産物からの疎外は、今日、どういう姿をとっているか。60年代に労働科学研究所の調査で製糸女性労働者から「私たちは絹を作っているが、結婚式で絹のドレスを着られるかどうか」と訴えられたことがある。このような直接の生産物からの疎外は、年収200万時代で結婚から子育てといったキャリアは殆ど考えられないフリーター青年が、豪華ホテルでの他人の結婚式にサービス労働者として派遣で働く場面などにいまもあるといえよう。しかし一般的にいえば、進んだ社会的分業のもとで自己の労働生産物や労働サービスを直接に享受できないことはいわば通例であって、問題は労働者が自己の賃金や社会保障給付で他人の労働生産物なり労働サービスをどれほど安定的に購入獲得できるかということが問題である。賃下げや失業=無賃金、社会保障の貧困化によって、生活必要用品の獲得や施設利用が困難・不安定だということは、19世紀前半のヨーロッパでも現代の日本でも大きな社会問題である。

労働そのものからの疎外はどうか。資本主義の初期段階では、労務管理論でいう「間接管理」が支配的であった。つまり、労働そのものは親方—職人—徒弟という労働者世界の中で伝承再生産される技能の発揮として行われ、資本家=会社は仕事のやり方には指図はせず、労働の結果のみを取得した。組を編成する親方請負制がその典型である。しかし、19世紀末から今世紀始めにかけ、機械設備の発展とともに旧来の万能的熟練は解体し、工場内分業が会社の生産管理的スタッフの動作研究・時間研究により「科学的」に編成される（テーラー主義）。技能は簡単な職務を一つばかり行う単能工か、いくつか行う多能工かのものになり、その仕事が流れ作業のもとで全体労働に構成される。フォード主義である。その心身傷害の風景はチャップリンの「モダンタイムス」でみることができる。単純だが沢山の達成すべき課業を与えられ、達成できない喪失感から自死を選ぶような労働、部分的身体行使の負担でおこる職業病、などなど、労働そのものからの疎外は今日一層深刻である。直接生産者たる労働者が、その供給が他人の存在に不可欠の有用行為ではなくて、無用あるいは却って心身

損傷的行為だということを自覚しながら会社から強制されてやむを得ず生産・販売を行っている場合は、次の類的存在からの疎外が、この労働そのものからの疎外と重なりもする。

類的存在からの疎外については、欠陥商品サービスの供給として、これまた今日一層深刻である。例えば下関市大で私の同僚である倫理学担当教授・西田雅弘さんの HP の「孤軍奮闘記」の頁にみるごとくである。そこには彼が五つの会社のクレーム担当者相手に闘った記録がある。マイクロ・ソフト社の「回答文」が面白い。一つ一つの語句は日本語ではあるが、全体としてどういう因果を言おうとしているのかさっぱり理解できないのである。PC ソフトのマニュアルがわけわからない日本語であることと、そっくりなのに驚く。

私も国鉄—JR や郵便局の窓口で、「努力の甲斐も無く今日も涙」で終わることが多いが、西田さんの「奮闘」を折々行ってきている。最近の事例を一つ紹介しておこう。大学の近くの下関東郵便局でのことだ。そこでは昨年春ごろ、サービス向上を謳って郵便と貯金・保険の窓口の分業を改善して、例えば郵便の窓口でも振替を扱うとしたのである。労働者にとっては労働負担増を含む多能工化＝「合理化」だが、消費者にとって多少は便利になるということのはずだった。私は、自分の振替口座から 90 近い組織・団体に会費や定期的カンパを送る。金額がいくらでも送金料は 15 円で通信文も付けられるからだ。だが大体これを扱う貯金の窓口は混雑で、1 枚の依頼用紙を出すだけなのに長時間待たねばならぬことが多い。そこでこの「合理化」は結構と当初受け止めた。しかし、郵便の窓口で依頼用紙を出すと「扱える・扱えない」の大騒ぎで、人によって受け取る場合と受け取らない場合と両様の対応だ。「多能工化」するのに何の訓練もしなかったのか、私との間でもめてそれをミーティングなどでどう解決するかといった議論はしなかったのか、私の不信は高まるばかりだった。

ところで、労働疎外の克服への処方箋として、初期マルクスが考えていたのは政治革命であった。例えば「労賃の腕ずくでの増額は（これは例外に属する・）、奴隷の給金をよくすることでしかない・私的所有等々や奴隷状態からの社会の解放は労働者の解放という政治的形態であられるという結論」（『経済学・哲学手稿』「疎外された労働」1844）と叙述しているごとくである。しかし、後期マルクスでは『賃金、価格、利潤』1865、1898）における展開で確認できるように、正規の大会戦（政治革命）途上のゲリラ戦と位置づけて初期マルクスとの連続性を保ってはいるが、労働組合の賃金闘争を積極的に評価し、賃上げによる産業構造の改革（現代流に言えば民主的改革）を説いている。私は後期マルクスを拡張して、三つの疎外それぞれについて労働組合の果たせる役割が大きいと主張する。公務員に限らず民間労働者も「全体の奉仕者たれ」と言ったりもしている。つぎの如くだ。「それぞれの部門の労働組合がより人間欲求実現的な協業への改革をめざし、制度改革を経営者や為政者に要求し、またみずからの労働改革を行うことを組合員に提唱することは有意義な歴史実践行為」

（「国鉄労働組合論」『現代世界と労働運動』1997）。この提唱は次のような経済政策論の主張ともつながっていることを最後に強調したい—「日本での経済への国家介入は専ら産業国家的に行われ、またかなり福祉国家的だった欧米でもビッグ・ビジネスや「冷戦軍需」に傾斜した「混合経済」だった。それらとはちがった平和主義と経済民主主義にたつケインズ主義国家への転換が人類史上、未実験の経済社会政策であり、あり得る（福祉国家、新自由主義に次ぐ）第三のパラダイム転換の構想はそのようなものとして与えられている」。（「新福祉国家の構造と公務労働者」『下関市立大学論集 42 巻 2 号』1998）（04/02/06）